

須 恵 器 1

大野城市教育委員会



窯跡出土の須恵器



古墳出土の須恵器



住居址出土の須恵器

須 恵 器 と は

須恵器は、今から約1500年前の古墳時代中頃に朝鮮半島からわが国へ伝えられたやきものです。おそらくその頃に、須恵器を焼く技術を持った人々が日本へ渡って来たのでしょう。

須恵器は、山や丘の斜面を利用して作られた登り窯の中で焼かれました。須恵器以前の日本の土器(縄文土器・弥生土器・土師器)は、地面の上や、あるいは少しだけ掘りくぼめた穴の中で焼かれていました。この方法では熱が空中に分散してしまうため、炎の温度はせいぜい800℃くらいのものでした。しかし、須恵器の登り窯は密閉されているため熱が外に逃げず、1000℃を越える温度を得ることができました。このため、須恵器は土師器などに比べてはるかによく焼きしめられており、爪ではじくと金属的な音がします。

わが国では、青森県から鹿児島県の徳之島にかけて、広く全国で須恵器の窯跡が見つかっています。その中でも特に窯跡の集中しているのが、大阪府堺市を中心とする陶邑窯跡群、愛知県名古屋市を中心とする猿投山窯跡群、そして本市を中心に春日・太宰府市にまたがる牛頸窯跡群の三つです。これまでは、日本最古の須恵器は陶邑で焼かれ、ここから全国へその技術が伝わったと考えられていました。ところが、最近各地で古い窯跡が見つかりはじめ、最も古い段階の須恵器は陶邑以外の場所でも焼かれていた可能性が高くなりました。



甕

須恵器にはいろいろな形がありますが、これは、その須恵器をどんなことに使うかによって、それにふさわしい形が自然に決まってきたためです。このページでは、特に須恵器を代表する5つの器種について、それがどのように使われていたのかを見てみましょう。

まず、これは**甕**です。一見ふつうの**壺**のようですが、胴部に穴があいています。この穴に管状のもの（フシを抜いた竹など）を差しこんで、酒などを注ぐ容器にしました。

須恵器の中で最もたくさん出土する器種です。**蓋**と**身**がセットで使われており、それぞれを「**杯蓋**」「**杯身**」と呼びます。「**蓋杯**」というのはそのセット関係を指す呼び名です。食物を盛るための器で、基本的には日用品ですが、いろいろなお祭りにもさかんに用いられています。



蓋杯



高杯

高杯は、杯身に脚がついたもので、**蓋**のつくものとつかないものがあります。この写真の高杯には蓋はつきません。高杯も食物を盛るための器ですが、日用品ではなく、主にいろいろなお祭りのために使われました。

「**瓶**」というのは、水や酒などの液体をいれておく容器を意味することばです。この**平瓶**の特長は、写真でもはっきりとわかるように、注ぎ口がかたよってつけられていることです。これは、中の水や酒の注ぎやすさを考えての工夫でしょう。



平瓶



円面硯

読んで字のとおり、円形の**硯**です。現在わたしたちが書道などで使っているものとはずいぶん形が違っていますが、天井部の中心の高いところで墨をすると、それがまわりのくぼんだ部分にたまっていくしくみになっています。